

Title	日朝関係と国交正常化問題の現状と展望
Author(s)	遠藤, 哲也
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, 第50号別冊 日・韓国際学術シンポジウム「東アジアの平和と民主主義」特集号, 2011.3 : 67-73
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3159
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

日朝関係と

国交正常化問題の現状と展望

遠藤 哲也

ご紹介いただきました遠藤でございます。私は今、東京の韓国大使館で一週間に一回、韓国語を勉強しているのですけれども、私はもう年齢がかなり上なので、どうも年寄りの冷や水といえますか、あまりうまくありません。したがって、今日は日本語で話をさせていただきますますが、この次こういう機会があるときには少しぐらいは韓国語でしゃべりたいと思っっているわけでございます。

日本と北朝鮮、日朝関係、それが象徴的にあらわれますのは日朝国交正常化の問題であらうと思いますが、その問題につきまして簡単に報告したいと思っております。三つに分けてお話ししたいと思います。一つは、なぜ日本と北朝鮮は国交を回復しなくてはいけないのかということ。もう一つは、いま日朝関係は完全にストップしてありますが、何が問題なのかという点。三番目に将来の展望というか、何かできるのかという問題を最後に申し上げます。

まず、日朝関係はなぜ正常化しなくてはいけないのかということですが、日本が戦争に負けてちょうど今年で六五年になります。その間、現在の時点において終戦処理というか、敗戦処理の外交案件としましては、細かいことは別として大きなものが二つあります。一つは旧ソ連、現在のロシアとは国交はありますが、領土問題が引つかかって平和条約は結ばれておりません。したがって、ロシアと領土問題を解決して平和条約を結ぶというのが一つです。もう一つが今の議題の北朝鮮との間の国交正常化交渉であるわけです。

では、なぜ国交正常化交渉が要るのかというと、やはり何と言いましても、朝鮮半島の北の部分である北朝鮮と日本は長い歴史の関係があり、あるいは近年においては非常に不幸な関係もあり、こういった過去の清算をしなければいけないということが一つ。それから隣の国でありながら、つまり一衣帯水の関係にありながら、この国と国交が全くないというのは極めて不便なことであるわけです。三番目に安全保障上、つまり正式に物も言えないような状況は早く解決したほうがいいということで、なるべく早い時期に国交を正常化したいと思ってるわけです。

しかしながら、何でもかんでも早くというわけでは決してなくて、やはり北朝鮮との国交正常化交渉というのは、東アジアあるいは北東アジアの平和と安定に役立つようなものでないといけない。特に、韓国あるいは日本のいま一つの同盟国であるアメリカとの関係、そういった中でブレッシング (blessing) を与えられるような国交正常化でなくてはいけないと思ってるわけです。

そういうようなことで、国交正常化交渉を開始したのは東西冷戦が終わった一九九一年です。したがって、今は二〇一〇年ですから二〇年ぐらいたっているわけです。ちなみに、韓国との間の国交正常化交渉は一四年ぐらいかかっています、一九六五年に妥結したわけですが、これも、このときでさえ一四年は長いと言われませんでした。北朝鮮との場合は既に二〇年ぐらい時間がたっています、全くいま国交正常化交渉のめどは立っておりません。したがって、これは超マラソン交渉みたいなことになっているわけです。

そこで二番目の問題として、どういう問題が国交正常化交渉で引っかかっているのかというと三つあるわけです。順序不同ですけど、一つは拉致問題。二番目は核の問題。私は核と言うよりも、核・ミサイルと言ったほうがより正確だと思います。したがって核・ミサイル問題。三番目に経済協力問題。つまり国交正常化のときに、幾ら北朝鮮に対して資金を供与するかという経済協力の問題。大きく分けるとこの三つです。

最初に、拉致問題ですけども、日本で日本人の拉致

事件が起こりましたのは一九七〇年代の終わり、正確に言いますと一九七七年ぐらいから一九七八年にかけて拉致が集中的に発生したわけです。私は当時、朝鮮半島を担当します北東アジア課長という職にありまして、そのときは、拉致というのは私どもが想像しただけであつて、はつきりしている事実というのは鹿児島とか、日本海側の鳥取、島根等々で日本人が消えるということであつたわけですが、いずれにしてもこの拉致問題が起り始めたわけです。

そのうち、一九八七年に大韓航空機爆破事件がソウルオリンピックの前年に起こつたわけですが、そのときの爆破犯人の自白から、その爆破犯人に日本語を教えた人間が日本から拉致された某人間であると、警察的に言いますと人定事項から九九%以上で同一人物であるということがわかつたわけです。そうこうしているうちにもう一人、横田めぐみという当時中学校二年ぐらいの一三〜一四歳の女性も拉致されたということが別の確度の高い情報からはつきりしまして、拉致問題が日本で非常に大きな問題になつてきた。殊に一三〜一四歳の女の子の拉

致につきましては、これはひどいということで、拉致が国民感情的な問題になつてきたわけです。

それで前に返りますと、爆破犯人の金賢姫（キム・ヒョンヒ、別名蜂谷真由美）に日本語を教えた女性の問題を、実は日朝国交正常化交渉の段階で我々は北朝鮮に向かつて取り上げたわけです。そうしたら北朝鮮の代表団は烈火のごとく怒つて、神聖な日朝国交正常化交渉の席において、ありもしない女の問題を取り出して会談をブレークダウンしようとするのかと激怒して退席して、会談中断となりました。日朝国交正常化交渉は一生懸命やつていましたが、一九九二年の秋に会談中断という状況がありました。

その後ずっと会談は中断してしまして、少し開いたこともありますが、少なくとも口実的には拉致問題を中心にして日朝国交正常化交渉は中断という状況が続いたわけですけれども、二〇〇二年に当時の小泉総理大臣が訪朝のときに、北朝鮮側の金正日国防委員長が、実は拉致は北朝鮮の特殊機関がやったことであると白状し、これに対して謝罪をしたわけです。謝罪をし、そして結

果として、確か一三人を拉致したと。そのうち八人は死亡し、五人は生きています、その五人プラス家族を帰してくれたわけです。

それで北朝鮮としては、拉致問題は悪かった、もう二度とやらないと言って謝罪したわけですが、もつともこの謝罪は口頭謝罪であつて、そのとき日朝の間で交換された共同声明には「拉致」という言葉は入っておりません。それはもうちよつと外交的な言葉で、「日本国民の生命と安全にかかわる懸案問題については、朝鮮民主主義人民共和国側は、日朝が不正常な関係の中にある中で生じたこのような遺憾な問題が今後再び生じることがないような適切な措置をとる」と。それで北朝鮮としては生きている人間を帰したし、最高首脳が謝つたのだから、これでおしまいだと。やることはもうやつたと。

ところが、日本では逆になりまして、むしろそれによつて、これは何だと。あとの八人は死んだというけれども、死んだという証拠はどこにあるんだというので大問題となつたわけです。その後、この問題はフォローアップしたのですが、残念ながら北朝鮮の説明は説明に

なつていない、説明がたえず変わる等々でもつて、完全に行き違いのままになつて現在に至つています。

したがつて、日本としては拉致問題の真相がはっきりしない以上、正常化はできないという状況が今でも続いているわけです。現在の時点ではどうなつているかという、再調査はしてもいいということを一回、数年前ですが北朝鮮は言つたわけです。しかしながら、その再調査はまだなされていないという状況で、ハードルの一つである拉致問題については、そういう状況が今でも続いているということです。

二番目の核の問題は、日本がこの核の問題を持ち出すたびに、北朝鮮いわく「この核の問題は日本と議論すべき問題ではない。核の問題を議論する相手はアメリカだけである」と。したがつて、この問題は日本と議論するつもりはないということ全く門前払いの状況ですけれども、日本はそうはいかないわけで相変わらず言うわけですが、答えは同じ。他方、六者協議が始まりまして、六者協議の中にはアメリカ、日本、韓国、ロシアが入っております。したがつて、六者協議の場でもつて核の問

題を追いかけるといことが現実的ではないかということですが、この六者協議自身、今までの議論にありましたように今のところ全く進んでいない状況であつて、核の問題もまた進んでいない状況であるわけです。

ミサイルの問題と言つたのは、核とミサイルとは全く不可分であつて、ミサイルのない核というのは運搬手段がないですから使いようがないわけですね。ところが、ミサイルのほうはご承知のとおり、北朝鮮が開発してかなり精度もよくなつてきている。少なくともノドンの精度は非常によくなつてきて、韓国はもちろんのこと日本全域がノドンミサイルの射程距離に入っている状況で、このミサイル問題は非常に深刻ですが、残念ながらミサイルを規制する国際法規範がありません。

ミサイル技術管理レジーム(MTCR)、あるいはハーグ行動規範というのがありますけれども、これは紳士協定であつて法的拘束力のある国際規範ではない。したがつて、私は個人的にミサイルの国際法規範をやがてつくらなければいけないと思うわけです。あるのは国連の安保理決議で、それでもつて北朝鮮のミサイルを制限し

ようとしているのですけれども、北朝鮮は強制力のある安保理決議を全く聞かないという状況が続いているわけです。したがつて、核ばかりではなくて、核・ミサイルという二つの続けた言葉で理解をすべきだろうと思ひますが、この問題も解決が進んでいない。

最後に三番目の経済協力問題ですけれども、韓国との間ではいろいろな問題があつたのは承知しておりますけれども、一九六五年の日韓国交正常化の交渉のときに、一〇年間にわたつて無償資金三億ドル、有償資金二億ドルということ、両政府間で合意されたわけです。合計五億ドルです。これは額が少ないと今の感覚では思われるかも知れませんが、当時の日本の外貨保有高は一八億ドルぐらいしかなかったものですから、これは大変な金額であつたことは事実です。そこで北朝鮮に対しても同じような日韓方式でこれをやると、小泉・金正日会談で合意されたわけです。

しかし、現実はこの問題は全然取り上げられていないですが、やがて交渉が軌道に乗れば、北朝鮮のねらいの一つはお金を取ることですが、それでは幾らにするとい

うめどは全くないわけです。それからこのお金というのは、日韓間で合意されたようにキャッシュが出るわけではないのです。資機材なり、役務の供与であつて、北朝鮮にも同じことをやるわけですけども、どうも北朝鮮の一部にはキャッシュが入ってくるのではないかと思つてゐる向きがあるような気がします。

さらに、これは想像以上に聞こえてくる話ですけども、どうも個人に対する損害賠償、つまり従軍慰安婦あるいは強制労働等に対する個人的な被害は今の話とは別だというような意見もちらちら聞こえてくるわけです。したがしまして、もし核・ミサイルと拉致の問題が何とか片付いた後は、このことは非常に大きな問題になつてくると思ひます。

いづれにしても、三つの問題が片付かない限り、日朝国交正常化は成り立たないわけで、今のところ全くめどがついておりません。拉致についても同じだし、核についても同じ。核については、まさに六者協議にかかつてゐるわけです。したがつて、今後どうなるんだらうという予想を最後に一言、二言申し上げますと、私はやはり

短期的には政権交代というか、今の後継者問題が北朝鮮で落ち着かない限り、この問題はしばらくの間、今のよゝうな状況が続くのではないかなと言ひ聞かせてゐるわけです。

では、後継者問題が向こうで落ち着いたときに何か発展があるのかということですが、私はここで何かのイニシアチブをとるとすれば、極めて人道的なイニシアチブをとることは可能ではないかなと個人的には思つてゐます。

つまり被爆者問題。長崎、広島で被爆した人は北朝鮮にもゐるわけです。今、生存者が三〇〇人ぐらいゐると言われていますが、八〇歳、九〇歳になつてゐる私たちの問題。それから同じく高齢化してゐる従軍慰安婦の問題。あるいは強制労働の対象の人たちの問題。あるいは遺骨の返還というのもあるわけですが、そういった極めて人道的な問題だけを何とか対応して、北朝鮮に対して日本はまじめなんだという姿勢、それで北の態度の変化とまでは言わないまでも少しの柔軟化でもいい、北の状況を見ながら話を進めていくということ。日本のと

り得る状況はそういうことなのかなという感じがしているわけです。

というようなことで、私は韓国とぜひ一緒にやりたいと思うのは、殊に核の問題であつて、この核の問題だけは北朝鮮は相手はアメリカだと言っているわけですけども、アメリカと日韓の北朝鮮の核に対する脅威認識はかなり違うわけです。アメリカに北朝鮮の核が届くのはまだまだ将来の話ではありますが、日本と韓国は既に北朝鮮の核の射程距離に入っていて、脅威認識が違うわけです。したがって、脅威認識を同じくする日韓がアメリカに対してしつかり頑張れと。北朝鮮の核を取り除くというところ。北朝鮮の核があるかないかわからないという状況では、日本が国交正常化して莫大な金を北に出すことは、到底不可能だと思います。

日朝国交正常化交渉の観点から見ても、あるいはより根源的には日韓の安全保障の観点から言つても、ここは一緒になつてアメリカと話をし、もちろん我々は北朝鮮に言うわけですけども、なかなか向こうが相手にしないものだから、アメリカが日韓の利益を代表して、頭に

入れて北と交渉してもらいたいと思つているわけです。この辺で私の話を終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。(拍手)